

Project brief 1

プロジェクト紹介

女川町復興まちづくり

～プロムナード設計及びテナント型商店街基本計画～

椎貝達也

SHIGAI Tatsuya
株式会社建設技術研究所
東北支社
まちづくり推進室
女川復興推進事務所
所長



下田謙二

SHIMODA Kenji
株式会社建設技術研究所
東北支社
まちづくり推進室
女川復興推進事務所
副所長



はじめに

本稿では、平成23年3月11日に発災した東北地方太平洋沖地震の津波により、甚大な被害を受けた女川町における復興の足取りについて、中心市街地に着目し、プロムナードとテナント型商店街で実施された復興プロジェクトを紹介する。

女川町の概要

女川町は、宮城県の東、牡鹿半島基部に位置し(図1)、風光明媚なリアス式海岸により良港が形成され、水産業が盛んである。

町の人口は、平成22年10月の国勢調査によると10,051人であったが、東日本大震災で死者・行方不明者827名(全町民の約1割)という

人口比最大の人的被害を受け、平成23年10月31日の住民基本台帳では8,548人まで減少した。

その後も人口減少は続き、減少率は平成27年国勢調査で36.98%と、県内一の比率となった。

一方、震災から約5年が経過し、復興事業が進むなか、平成28年2月の人口が前月と同数となり、震災以降続いた人口減少が初めて止まり、復興の兆しが見えてきた。

復興まちづくりの仕組み

女川町は復興まちづくりに際して、学識経験者、医療・漁業・商工・観光等各団体代表者、地区代表者、宮城県などをメンバーとする復興計画策定委員会を平成23年4月に

発足させ、協議を進めてきた。

復興計画策定後、さらに専門的な視点から検討を進めるため、学識者や専門家などによる「女川町復興まちづくりデザイン会議」が組織され、女川町の復興を牽引した。

このデザイン会議は、復興の進捗状況と今後の行方を知ることができ、誰でも自由に参加し、発言できるユニークな議論の場である。平成24～26年度は月1回、平成27年度からは隔月開催となった。

会議は、須田町長と学識者3名の委員がメインテーブルで車座になり、議論の突破口を開く。主な出席者であるUR、女川まちづくりJV(鹿島建設・オオバ)、町担当課長に対し、平野委員長から質問を投げか



図1 女川町の位置

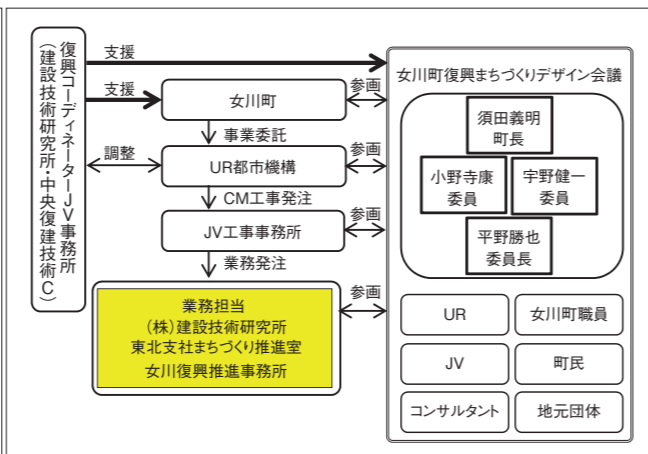


図2 「女川町復興まちづくりデザイン会議」の位置付け

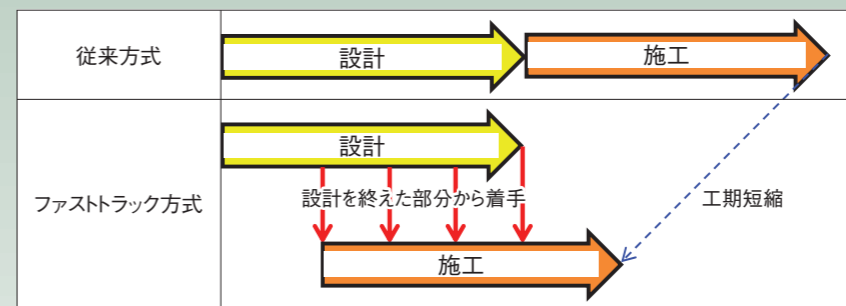


図3 ファストトラック方式のイメージ

け、議論を深めた。

設計思想や施工手順などは、デザイン会議で方向性が確認され、役割分担が決められた。町民からの意見も受け入れ、対応方針も決めていくことが多々あった。

当社が担当したプロムナードやテナント商店街などのプロジェクトも、デザイン・設計の確認や了承を得ながら進めていった(図2)。

ファストトラック方式の採用

もう一つ、復興まちづくりのポイントがある。本プロジェクトのうちプロムナード設計に適用したファストトラック(Fast Track)方式により、大幅な工期短縮ができたことである。

ファストトラック方式とは、当社が行った実施設計の完了した部分から、順次、女川まちづくりJVに引渡し施工を進める方式である。

この方式の採用により、手戻りを最小限に抑え、効率的に施工したことが「おながわ復興まちびらき2015

春(平成27年3月21日)」をマイルストーンとする、復興まちづくりの工期を守ることができた秘訣でもあった(図3)。

プロムナード設計

プロムナードとは、女川駅前広場と女川湾を一直線に繋ぐ全長約200m、幅員15mの煉瓦敷きの歩行者専用道路である。

プロムナードは女川町のシンボルとして位置づけられ、町の玄関口として、中心市街地に人々が集まり、回遊して賑わいを広げる機能を備えるものとした。

プロムナードのデザインは、平成26年11月に策定された『女川町まちづくりデザインのあらまし(初版)』と整合し、「海を眺めて賑わい、暮らす、まちの居場所としての交流拠点」をデザインコンセプトに設定した(図4)。

● プロムナードデザインの基本構成
プロムナードは、中心市街地の

シンボル軸として、町の骨格を形成する。

商業施設、公共施設はプロムナード周辺に集中しコンパクトなまちづくりとなる。プロムナード自体も単なる通過動線ではなく、オープンカフェの雰囲気を行いながら、海を眺めて商業活動できる場とする。

二列の並木道の先に海が見える視線軸を確保しながら、季節ごとに雰囲気が変わる木々に彩られた、小公園が連続するような歩行者専用道路とする。

● 設計コンセプト

「地域産業の有機的連携により、新たなにぎわいと自然環境に調和した、いやしの空間」の主軸となる。

プロムナードを中心に町民や観光客が利用する、海を見ながら買い物や飲食を楽しむ賑わいの場となる。周辺施設から人が集まり、人が回遊しにぎわいの軸を広げる拠点となる。

沿道建物と一体的に利用されながら様々なシーンが連続する空間を創出する(図5)。

● 空間構成

日常利用のほか、様々なイベントにも対応できる空間とし、煉瓦舗装主体で、ストリートファニチュアは並木の軸線上にコンパクトに整理する。

二列並木による横断構成4.5+

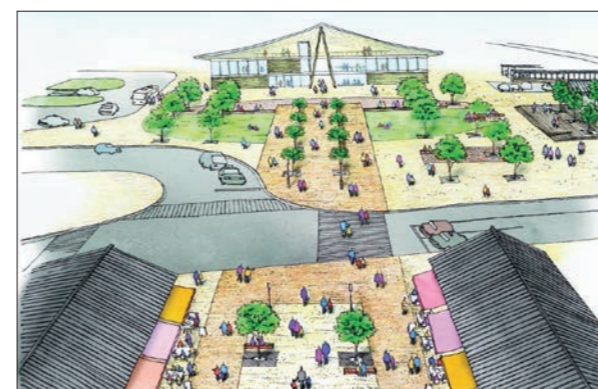


図4 プロムナードの計画概要



図5 プロムナード平面図

6.0+ 4.5 (= 15.0m) の空間構成とする。中央は海を眺望する視線軸であり、かつ主動線である。その両側(側面部)は、沿道との一体利用を図る空間であり、並木下のベンチで憩いながら海を見ることのできる場を形成する。

● 素材

持続力のある自然系の素材で空間を構成する。

舗装は、できるだけ自然に近い色彩を持ち、色あせない煉瓦を数種類組み合わせたものを基本とする。

イベント時の車両乗り入れなどが想定される場所は、アスファルトコンクリートなどを基本仕様とする。

● 空間演出

二列植栽で海への視界を確保しつつ、季節ごとの風情を演出する樹種で並木を形成し、足元には煉瓦ベンチ、沿道空間と一体の舗装パターンなどを適宜配置して変化を与える。

街路というよりは、小公園が連続する線状広場として、変化を楽しめる空間を演出する。

並木下の煉瓦ベンチは、フットライトやイベント用コンセントなどを内蔵し、イベント時にも対応する(図6)(写真1)。

シーバルピア女川の基本計画

シーバルピア女川は、平成27年12月に開業した、プロムナード沿いのテナント型商店街である。事業主体は、平成26年6月に設立した女川みらい創造株式会社であり、女川町、商工会、観光協会などが出資した公民連携によるまちづくり会社である。

日常生活をサポートする商業機能

女川町中心市街地の商業施設と



図6 プロムナードの模型



写真1 完成したプロムナードの様子

して最初に整備される施設であり、女川町民や町内での就業者等、町を日常的に利用する人々の生活基盤となる商業機能を確保した。

町外のスーパー等に自家用車で買物に行かなくても、日常生活に必要なものが一通りそろえられるよう、店舗構成・商品構成を考慮した。約700世帯が仮設住宅で生活を送っている女川町において、まちの中心部に豊かな空間を形成し、生活に潤いと楽しみを提供し、女川町での生活再建や定住化を牽引するものとした。

来訪者の需要に対応した商業機能

平成27年3月のJR女川駅再開を皮切りに、女川町のまちの復興が本格化した。これに伴い、観光、仕事、港および市場の利用による来訪者も増加することが期待されている。町民の生活基盤としての役割に加えて、プロムナードの沿道に立地し、(仮称)物産センター等の観光拠点施設に隣接していることから、各店舗の業種・業態開発や新規事業者の参入を通じ、来訪者や観光客のニーズに対応できる商業機能を充実させた。

被災事業者の再建場所

被災事業者は、「きぼうのかね商店街」等の仮設店舗で営業しているため、事業再建場所となるよう計画した。

震災前までの女川町は、住まいを兼ねた店舗での営業が主であったが、新たな商業地域は災害危険区域で住居整備ができない状況であった。そのため、住居と商業施設を別々に自力で再建できない事業者も想定されたことから、安価で商売の再建ができる施設とした。

施設の持続性

被災事業者が継続して利用することを前提としながらも、店舗の入れ替え等に対して柔軟に対応(可変性や拡張性を高めた施設とする)し、シャッター街とならないよう新規事業者の受け入れを行い、施設・エリアの活力向上と共に持続性を果たせる必要があった。また、持続性を担保するためには、初期投資をできるだけ抑えつつ、魅力的で使い勝手の良い店舗計画とした。

魅力的な商業交流環境

震災前の女川町の商業施設では、魅力、活気が十分とは言えない状況が見られたため、新たな施設は、商業エリアの中心に立地し、エ

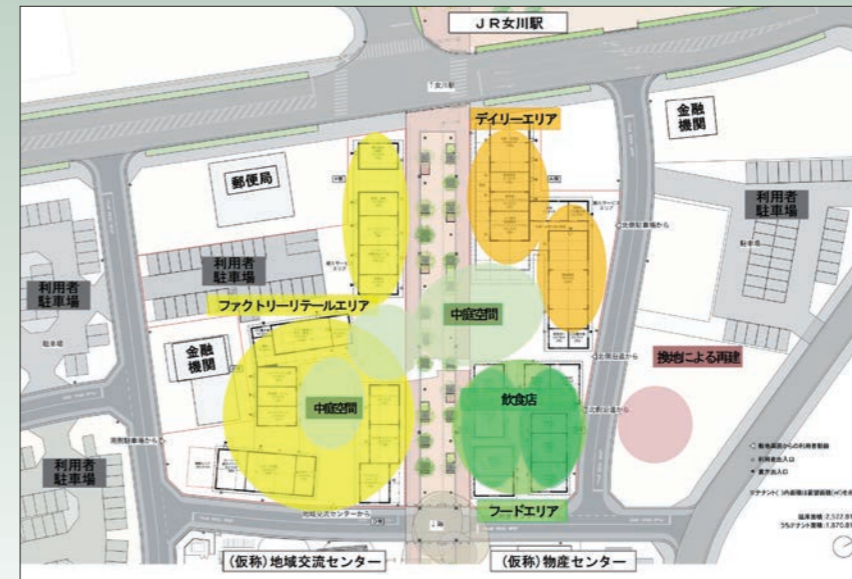


図7 シーバルピア女川の計画図



図8 観光交流エリアの模型



写真2 賑わう商店街とプロムナード



写真3 完成したシーバルピア女川の様子

リアの連動性を高めるとともに、プロムナードを基軸に魅力的な街並みを形成し、来訪者、事業者双方にとって使い勝手がよく、楽しく過ごせる場所とした。

具体的には、駐車場を計画的に確保するとともに、広場や路地等のオープンスペースを適切に配置し、戦略的な空間形成を行い、活力を維持するための運営計画を設定した(図7)。

● 施設コンセプト

まちの生活インフラとなる商店街(生活必需品+楽しさ・豊かさ・新しさを提供する場所)とする。

商業機能を通じて、女川町を利用する様々な人々が集い、交流する舞

台となる商業交流施設とする。

● 店舗構成の考え方

個店の集積により、生活インフラとしての商業施設をつくりだす構成とする。

商店街の構成要素に基づく必需店舗と、魅力ある独自店舗のミックスにより構成する。

新しい女川を発信していく店舗を取り込む構成とする。

利用者にとって「利便性や楽しさが得られる場所」、事業者にとって「様々な業種業態での出店・起業の可能性が開ける場所」とすることで、エリアのにぎわいや活力を形成・持続させていくことを目指す。

以上、テナント型商店街の基本計

画を策定し、当社から設計を実施する東環境・建築研究所に引き継いだ。(写真2, 3)

おわりに

今後、プロムナードは国道398号と交差し、女川湾まで延伸する計画である。延伸したエリアは観光交流の場として、イベント広場や「震災遺構 旧女川交番」が保存される(図8)。

追悼と希望の象徴として、さらなる復興まちづくりは続くだろう。

<資料>
図4, 6, 8 イラスト・模型制作 小野寺康都市設計事務所